

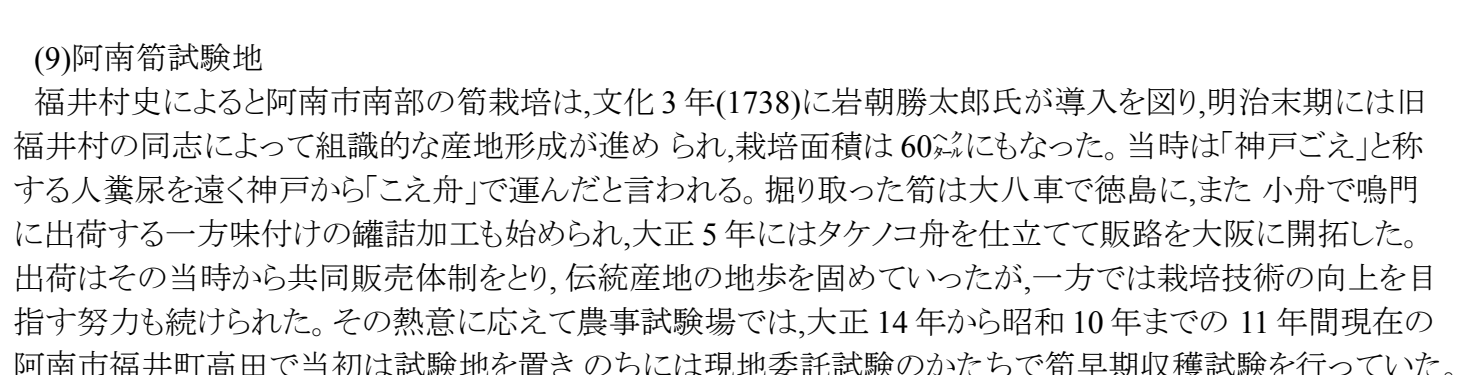
初代主任には富岡芳雄技師が就任、そのあと阿部泰典、安芸精市分場長らが他の職員と共にイチゴ芳玉およびシロウリ阿波みどり品種の育成をはじめ、ハウスの落果防止対策など多くの成果をあげた。しかし、昭和45年4月には再び試験地となった(規則第24号)。そして本場が石井町に移転、施設、圃場も拡充、整備されたのを機に廃止が決まり、46年8月に開設以来19年の幕を閉じた。

昭和35年当時の建物、圃場の配置図は第17図のとおりである。



(8) 海南分場
海南郡内では、昭和24年頃から油障子によるキュウリの早出し栽培が始まり、海部郡農業振興協議会が主体となって促成野菜栽培の振興を本格的に図り始めた。これが発端となって昭和26年に海部郡川東村大字四方原に海部郡農業振興協議会海部園芸研究所が設立された。その後28年頃からビニール被覆栽培の始まりと共に、冬期における県南の温暖な気候を利用した園芸作物の栽培が盛んになってきた。しかし新しい栽培技術のため各作目の栽培上にいろいろな問題が生じてきた。すなわち、キュウリ・トマトの早出し栽培では播種期の前進に伴う栽培法および品種の問題、海部青軸鉄砲コリの早出し栽培における種球の自家生産の方法、パイナップルの早出し栽培技術の確立など早期解決を望む声が高まりつつあった。このような地域の農業事情を背景に、生産者および関係機関の強い要望で、昭和29年4月に海部郡農業振興協議会設立による海部園芸研究所が県に寄付され、ここに徳島県立農事試験場海部園芸試験地が開設された。そして翌30年4月には町村合併に伴い、所在地が海南町に変わり、32年2月には農事試験場の全面的な規則改正が行われたのに伴い、名称を海南園芸試験地と変更した。その後試験課題の増加などによって試験圃場が手狭になり、さらに用地が借地であったことなどから43年3月に現在地(海南町多良)に新築移転し、46年4月に試験地から分場に昇格した。現在地に移転前および後の建物、施設、圃場の状況は図示のとおりである。なお四方原の時代から併設されていた海部普及所海南支所は、分場と共に移転し、同じ建物の中に在って研究と普及指導が緊密に連携しながら効率を上げている。本館、作業舎ガラス室以外の現在の主要な施設はZM型鉄骨ハウス(600㎡)、鉄骨屋根型ハウス(300㎡)および育苗パイプハウス(108㎡)である。

昭和29年4月発足当時の職員は、園芸研究所の職員2名のほか主任として着任した川崎技師の3名であった。37年には松崎技師が川崎技師と交替、46年分場昇格に伴い、初代分場長となったが、53年に日和佐農業改良普及所海南支所長への転出によって、川島農業改良普及所から藤井文明技術主任が着任し、さらに55年からは福岡省二分場長となった。開設から現在までの職員数の変動は下のとおりで、45年以降は研究員2名、技術員1名計3名であるが、33年から38年の6年間は研究員1名と言ったきびしい時代もあった。



第11表 海南分場の職員数の変動					
年次	29	30	31 ～38	39 ～44	45 ～58
研究職	2	1	1	2	2
行政職					
技能職	1	1			
計	3	2	1	2	3

(9)阿南筍試験地
福井村史によると阿南市南部の筍栽培は、文化3年(1738)に岩朝勝太郎氏が導入を図り、明治末期には旧福井村の同志によって組織的な産地形成が進められ、栽培面積は602にもなった。当時は「神戸ごえ」と称する人糞尿を遠く神戸から「こえ舟」で運んだと言われる。掘り取った筍は大人車で徳島に、また小舟で鳴門に出荷する一方味噌付けの罐詰加工も始められ、大正5年にはタケノコ舟を仕立てて販路を大坂に開拓した。出荷はその当時から共同販売体制をとり、伝統産地の地歩を固めていったが、一方では栽培技術の向上を目指す努力も続けられた。その熱意に応じて農事試験場では、大正14年から昭和10年までの11年間現在の阿南市福井町高田で当初は試験地を置き、のちに現地委託試験のかたちで筍早期収穫試験を行っていた。その後間もなく日支事変が勃発し、続いて第2次世界大戦争が始まると、米麦など主要食糧の増産が農家の重大な使命となる一方、肥料なども不足して十分な管理、生産をあげることが困難になってきた。この状態は戦後もしばらく続いた。しかし食糧事情が好転しはじめると再び産地振興の気運が高まり、それに伴って筍専門の試験研究機関の設置を望む地元の声が高くなった。そのため県では、地元の要望に応え、昭和29年に全国でも数少ない筍栽培試験地の設立を議決した。そして地元から8反7畝26歩の用地と70万円の寄付ならびに隣接の岩浅敏男氏から事務所敷地(33坪)の無償貸与を受け、事務費120万円で着工の運びとなった。しかし事情によって工事は翌年に繰り越され、さらに35万円を増額し合計155万円(うち工事諸費67万4000円)を投じて、那賀郡橘町下福井字中連93番地に開設され、31年5月29日に橘町福井公民館で竣工式が挙行された。開設当初は徳島県筍栽培指導所と呼称し、農業改良課の直轄であった。30年3月24日の設置概要には、その目的を「徳島県における筍の生産は、作付面積約1,000町歩に及び其の生産額は150万貫に達する本県特産蔬菜の代表的なものであり、早期出荷と自主的統制出荷によりその声価を維持しているためには、科学的栽培技術の研究と普及が必要なので、本県生産の中心地である那賀郡福井村に県立筍栽培指導所を設置して筍栽培を育成助長する」と述べている。翌31年には農業改良課から農事試験場へ移管され、徳島県立農事試験場筍栽培試験地と呼んだ。間もなく町村合併によって所在地が福井村から橘町となったため、32年2月には橘筍試験地と名称を改め、さらに40年には阿南筍試験地と改称し、現在に至っている。試験地の職員は、開設当初は那賀南部農業改良普及所の庄野所長が栽培指導所長を兼務し、他に技師および助手各1名となっていたが、実際には臨時人夫1名が管理していた。農事試験場に移管された31年からは丸尾包治技師が常駐し、他に技術員1名の2人で現在まで主として早期収穫技術、肥培管理方法および障害防止対策などの試験を実施、成果をあげている。建物および圃場の配置図は前ページののとおりで、現在も変わっていない。



第20図 阿南筍試験地建物圃場配置図 (昭和30年12月)